

原著論文

地域で生活する統合失調症者のセルフケア行動
—孤独と社会的相互作用のバランスの維持に焦点を当てて—

**Self-Care of People with Schizophrenia Living in Community
—Focus on maintenance of balance of solitude
and social interaction—**

川村 真心 (Kokoro Kawamura)*
貴田 祥子 (Shouko Kida)**
春田 碧 (Midori Haruta)*****

笹岡 道代 (Michiyo Sasaoka)**
佐野 理香 (Rika Sano)****

要 約

本研究では地域で生活する統合失調症者の孤独と社会的相互作用のバランスの維持におけるセルフケア行動を明らかにすることを目的とし、対象者5名に対して半構成的インタビューガイドを用いて、面接を行い質的帰納的に分析を行った。その結果、10のテーマが明らかになった。対象者は自己決定に基づいてセルフケア行動を行うことで、楽しさ、安心感、充実感などが得られていることがわかった。また、人付き合いにかけける時間、一人で過ごすためにかけける時間は、人によって異なっているが、その人なりに上手く孤独と社会的相互作用のバランスをとっていると考えられた。このように自分の望むセルフケア行動を行うことで、満足いく生活を送ることができ、生活の質が高まることにつながるのではないかと考えられた。統合失調症を持つ人が地域で継続して生活していただくだけでなく、その人自身が満足できる生活を送るためには、看護師は現在行っているセルフケア行動を維持したり、高めていくことが必要であることが示唆された。

キーワード：セルフケア行動、孤独と社会的相互作用のバランスの維持、地域、生活

1. はじめに

平成15年の「新障害者プラン」では、「障害者プラン」に引き続き、精神障害者の社会復帰推進を目的とし、日常生活の訓練、生活の場あるいは活動の場を提供するための社会復帰施設や地域生活支援事業などの整備の推進をしていくこととしている。また、厚生労働省の病院報告¹⁾において、平成8年と平成14年の精神病床の退院患者数を比較すると、283,092人から334,876人と増加し、また平成8年と平成14年の患者調査²⁾³⁾の外来患者数では、155,600人から200,300人に増加している。このことから、精神障害者の生活の場は、施策の影響も受け確実に病院から地域へと移行していると考えられる。

地域での生活は、自分で判断・決定して、行動するセルフケアを行う機会が多いが、精神障害者は、意思決定や選択が難しく、セルフケア能力が低いといわれている。中でも、孤独と社会的相互作用のバランスの維持の領域は、精神障害者にとって多くの困難を含む領域であるとされている⁴⁾。しかし、セルフケアに関する先行研究⁵⁾をみると、地域で生活する統合失調症者が自己決定に基づいたセルフケア行動を行っている実態が明らかになっている。また、地域で生活する精神障害者の生活の自己管理や支援について述べた研究⁶⁾⁷⁾では、精神障害者は対人関係で、他者に踏み込まない、距離を置く、仲間と交流をする、仲間を気遣って生活をしていると述べられており、対人関係において工夫をしていることが明らかになっている。精神障害者は

*医療法人 近森会 近森病院第二分院 **医療法人 みずき会 芸西病院 ***大阪医科大学付属病院
****医療法人 光愛会 光愛病院 *****財団法人 精神医学研究所附属 東京武蔵野病院

対人関係で困難を感じながらも、その人なりに工夫をして、セルフケア行動を行っているのではないかと考えられた。セルフケア行動は、自己決定に基づいた意図的行動であるため、行動のみをみるだけでは、その人のセルフケア行動を十分に理解することはできない。その人の行動のみではなく、その人がどう考え自己決定をしたかを含めて理解することで、その人なりのセルフケア行動を認めた関わりができるようになり、また看護援助の示唆を得ることができると考える。よって本研究では、精神障害者の中でも特に統合失調症を患う人が、どのように自己で決定し、孤独と社会的相互作用のバランスの維持におけるセルフケア行動を行っているのか明らかにしたいと考えた。

II. 研究の目的

地域で生活する統合失調症者の孤独と社会的相互作用のバランスの維持におけるセルフケア行動を明らかにする。

III. 用語の定義

1. セルフケア行動の定義

地域で生活していくためには、自分で考え決定していくという自己決定が必要であり、それはその人らしく生活するためにも重要である。また、自己決定、行動、評価というセルフケアのプロセスがあってこそ、自分の考え、行動を振り返ることができ、次のセルフケア行動がより良いものになると考える。本研究ではP. Underwoodの考え方を参考にし、セルフケア行動を、「個人の健康、安寧を維持するために自己決定した行動を行うこと」と定義した。

2. 孤独と社会的相互作用のバランスの維持

D. Orem⁸⁾は孤独と社会的相互作用のバランスについて、「孤独と社会的相互作用のバランスの維持は、知識が習得され、価値観や期待が形成され、安全と自己実現の手段が達成される発達過程に不可欠な状態をもたらす」と述べている。つまり、その人が考える自分

に合った孤独と社会的相互作用のバランスを維持することは、自己の発達過程において欠かせないものであり、発達によって人と付き合い合っていくことも容易になっていく。

孤独でありたくないのに孤独であること、孤独でありたいのに孤独になれないこと、望む孤独を得られていること、人と付き合いたいときに付き合えること、といったことは、孤独と社会的相互作用のバランスによるものである。このバランスは、その人自身の物理的・心理的状況や状態によっても変化するため、その時の状況や状態によってその人自身が調整し、バランスをとっていくことで上手く人と付き合い合っていくことができるのではないかと考える。このことから、孤独と社会的相互作用のバランスを自分自身でとりながら生活していくことが重要である。

IV. 研究方法

1. 研究デザイン

セルフケア行動は、自己決定に基づいた意図的行動であるため、行動のみを見るだけではなく、その人がどう考え自己決定をしたかを含めて理解する必要があると考え、対象者の気持ち、価値観、行動などを主観的に捉えることができる質的帰納的研究方法を用いることとした。

2. 対象者

対象者は、病院のデイケアに通う地域で生活している統合失調症者で、症状が安定しており、孤独と社会的相互作用のバランスの維持におけるセルフケア行動について語る事が可能な人とした。研究協力施設から紹介を受け、研究目的・方法・所要時間・プライバシーや倫理性の確保を説明し、同意を得られた者とした。

3. データ収集期間

平成17年7月半ばから9月上旬

4. データ収集方法

研究の枠組みに沿って半構成的インタビューガイドを作成し、面接を行った。対象者の心

理的負担を軽減し、信頼関係を形成すること、そのことによって対象者が思いや考えを自由に話すことができるように、面接の前にデイケアに通所しているデイケアメンバーと共に過ごし、交流を深めた。面接は一人につき2回とし、1回30分程度で行った。

5. データの分析方法

得られたデータを逐語的に記録し、ケース像を作成した上で、逐語録から「地域で生活する統合失調症者の孤独と社会的相互作用のバランスの維持におけるセルフケア行動」を抽出し、その内容を分類しテーマを抽出した。

また、研究者の分析能力の未熟さから、データの分析の視点に偏りが生じる可能性もあると考えられたため、データ分析時には研究者全員で確認を行い、定期的に指導教員に指導を受けながら進めた。

6. 倫理的配慮

対象者に対しては、研究の目的・方法、プ

ライバシーの保護について文書及び口頭で説明し、参加は自由意思であり、いつでも中止できること、中止することが不利益をおよぼさないことを伝え、研究参加への同意を得た。高知女子大学看護研究倫理審査委員会で承認を得て行った。

V. 研究結果

1. 対象者の概要

対象者は、30～50歳代の男性5名で全員に入院経験があり、デイケア通所期間は4ヶ月～3年であった。生活の場は、援護寮、グループホーム、自宅であった。

2. テーマの説明

分析の結果、地域で生活する統合失調症者の孤独と社会的相互作用のバランスの維持におけるセルフケア行動に関して10のテーマが抽出された。(表1参照)それぞれのテーマについて説明していく。

表1 「地域で生活する統合失調症者の孤独と社会的相互作用のバランスの維持におけるセルフケア行動」テーマ一覧

テーマ1	けんかなく仲良く付き合いたいので、自分のことだけを考えるのではなく相手のことも考えて接することで、みんなが気分良くいることができる場をつくる
テーマ2	精神的にも身体的にも頑張り過ぎない付き合いをしたいので、気の合う慣れた相手と付き合い、楽しさや心地よさを得る
テーマ3	あまり関わりがなくよく知らない人とも、仲良くしている人とも、もっと親しくなりたいので、心を開いて自分から話しかける、何かをしてあげるなどして相手に近づく
テーマ4	人といると楽しく、寂しさや不安を紛らわすことができたり、自分を実感できたりするので、一人でいるよりも人と一緒に過ごす
テーマ5	自分にとって得になったり満たされるものがあるので、助けてくれる人や受け入れてくれる人を自分から積極的に選んで関わる
テーマ6	周りの人が心配で放っておけないので、何かしてあげたいと思い、自分ができることを考えて相手を気遣う
テーマ7	自分のことを気にかけてくれる人や関係が悪くなったら困る人には、嫌な印象を与えたくないので、節度ある行動をとる
テーマ8	気分が落ち込んでいる時や人と接して気疲れした時は、人と一緒にいたくないので、人から離れて過ごし、また人と付き合うための力を充電する
テーマ9	一人でやりたいことがあるので、積極的に一人の時間を作って、その時間を大切に使う
テーマ10	空いている時間を人と過ごそうと思うのではなく、気ままに過ごせる自分の時間として、するところを見つけて一人で過ごす

＜テーマ1＞けんかなく仲良く付き合いたいのので、自分のことだけを考えるのではなく相手のことも考えて接することで、みんなが気分良くいることができる場をつくる

「仲良くやっていきたい。相手側がイライラしよるときが多いわね、喧嘩なる時は。イライラしゆな思うたら避けて通る。態度見たらわかるき。」(ケースB) というように喧嘩をせずに仲良くしたいという強い思いがあり、人に不快な思いをさせない、人を楽しませる、場を盛り上げる、「(友達が落ち込んでいた時には) 落ち込んだりして、かわいそうなというか、おもしろくないですからね。落ち込んだったらね、それで声をかけたりするんです。やっぱりみんなが気分よく生活していかないかんからね」(ケースC) など、一緒にいる人が気分良く過ごせるように相手のことを考えた行動をとっている。相手に気を配ることで、自分が過ごしやすい状況をつくったり、自分自身も楽しめる方法で相手に気を配ることで、みんなが気分良く過ごせる状況をつくっている。

＜テーマ2＞精神的にも身体的にも頑張り過ぎない付き合いをしたいので、気の合う慣れた相手と付き合い、楽しさや心地よさを得る

対象者は、人付き合いにおいて、無理をしたくない、自分がしんどくなることは避けたい、気の向くままに過ごしたいと考えている。そのため、「しんどい人とは付き合いません。(しんどい人は) なんか鈍ちょうな人。話しよってもびんぴんとこん人。気の利いた人じゃないと話がおもしろくないから。」(ケースA) など特定の気の合う人と付き合ったり、「あそこ(ソファのある場所)は居場所です。慣れてるし、座り心地がいいし。話相手の人があそこにいつもいますから。」(ケースA) というように居心地のよい場所で体を休めながら、気を使うことなく一緒に過ごせる相手と話したり、付き合うのに手間がかからない身近な人と付き合うなど、精神的だけでなく身体的にも無理のない付き合いをしている。このように気の合う慣れた相手と頑張り過ぎずに付き合うことで、楽しさや心地よさを得ている。

＜テーマ3＞あまり関わりがなくよく知らない人とも、仲良くしている人とも、もっと親しくなりたいので、心を開いて自分から話しかける、何かをしてあげるなどして相手に近づく

対象者には、仲良くしている人だけではなく、自分とあまり関わりがない人とももっと親しくなりたいという思いがある。「とっつきにくい人(話が合わない人)とは話をしようとは思わんがですけど。普通にとっつきにくい人にも朝の挨拶とかはしてます。とっつきにくい人でも話してみると案外気さくな方で、いい人だなと思うような人もいますからね、話してみないとわからないですからね。」(ケースC) のように心を開いて相手に自分から声をかける、「心から話せるような付き合い方がしたいですね。悩みとかを打ち明けられたり、こそこそ話をせんずつ、ちゃんと向き合って話す。」「(困った時は) 身近な人とか…デイのメンバーの人とか(に話す)…」(ケースE) というように自分の考えを相手に話す、相手に何かをしてあげる、といった自分なりの方法で相手に近づき、仲を深めることができるように工夫している。また、そのような行動をとることで自分のことを知ってもらうだけでなく、相手のことを知ろうと努力している。

＜テーマ4＞人といると楽しく、寂しさや不安を紛らわすことができたり、自分を実感できたりするので、一人でいるよりも人と一緒に過ごす

対象者にとって人と過ごすことは、「(誰かが) 居てくれないと寂しいです。ひとりぼっちの時に寂しいです。誰か話相手がほしいです。(寂しい時は) 気の合う人のところ行ってますけど。」(ケースA) というように一人でいる時の寂しさを紛らわせたり、「人の中にいることは嫌いじゃないんで。苦痛にもそんなならないしね。一人だったら不安になってしまうことも出てくるし、余計なことを考えたりするんでね。雑念が入りやすいし。」(ケースD) というように不安や雑念など自分にとって余計なことを考えてしまうのを妨げたり、楽しさを感じさせてくれたり、周り

の人がよい刺激となり自分を実感させてくれるものとなっており、一人でいるよりも人と過ごしたいと感じている。そのため対象者は、人の輪の中にいる、人が集まる場所に行く、人と行動を共にする、といったように自分なりの方法で、人と一緒に過ごせるようにしている。

＜テーマ5＞自分にとって得になったり満たされるものがあるので、助けてくれる人や受け入れてくれる人を自分から積極的に選んで関わる

対象者は、自分に得になったり、求めているものを満たしてくれる人と関わりたいと思っており、「(両親の意見と)自分の意見も合ってますから。自分の分からないことをよくわかってくれると思うんで。そういう信頼関係みたいなものがあるんで。(話して)良かったなと思ってますけどね。今の日常の生活が満足になれていると思うんで。」(ケースD)と自分のことを助けてくれる人や理解してくれる人や「今のところ自分のことを話したいゆうのは、先生。先生信頼できるわねえ。」(ケースB)というように話を聞いてくれる人を選んでいて。また反対に、関わりたいと思わない相手とは関わらないなど行動は様々であるが、それぞれが自分の望む相手を積極的に選んで関わっている。

＜テーマ6＞周りの人が心配で放っておけないので、何かしてあげたいと思い、自分ができることを考えて相手を気遣う

「(友人の)相談というわけではないけど、話をしましたね。してあげたいというか…困った時は相談に乗ってあげたいと思いますけどね。」(ケースC)のように困っている友達や「一人ほら…おったらよね、(中略)…あまりよう喋らん人とか、かわいそう…一緒に仲間に入れちゃりたい。(ひとりぼっちでいるのはかわいそうなので、苦手な人やあまり普段話さない人にも)声をかける。」(ケースE)のようにひとりぼっちでいる人、また離れて暮らしている親のことが気になり、そのままでは放っておけないと感じている。そのため、友達の相談に乗ったり、親の顔を見に行くな

どし、また親しい人ではなくても、ひとりぼっちでいる人がいれば、声をかけて仲間に誘っている。このように、普段から相手のことを考えて気遣っており、相手のために自分なりにできることを考えて行動をしている。これらの行動には、対象者の優しさが強く表れている。

＜テーマ7＞自分のことを気にかけてくれる人や関係が悪くなったら困る人には、嫌な印象を与えたくないの、節度ある行動をとる

対象者にとって、自分のことを気にかけてくれる人や「(グループホームのメンバーの)4人もみんながおごってくれる。何度かジュースおごっちゃったり、おごってくれるき、ほら。おごりかえしたり。一人飲みよったら、みんな飲みやせんやんか。…それで、お返しせないかんと思って。」(ケースE)というように関係が悪くなったら困る人とは、気にかけてもらえたり支援してもらえる今の関係を保っていきたいと思っている。そのため、「(スタッフとの付き合いにおいて気をつけていることは)別にないですけど。スタッフの方とは仲良くなってもある程度距離をおいて、接するようにしています。」「やっぱし、スタッフですからね、友達ではないから、あまり気安く話すといけないと思ひまして。ある程度、敬語なんかも使って話すようにしています。」(ケースC)のように自分の立場をわきまえて気安く話さない、心配をかけないように連絡をするなど、社会的に認められるような節度ある行動をとることで、相手に嫌な印象を与えないようにし、その人との関係を維持しようとしている。

＜テーマ8＞気分が落ち込んでいる時や人と接して気疲れした時は、人と一緒にいたくないので、人から離れて過ごし、また人と付き合うための力を充電する

「精神的とか肉体的に疲れている時にちょっと喋りたくない時があります。やっぱし落ち込んだ時ですねえ。話し好きですけど、話をしたくないという時もあるんですよ。その時に一人になりたいなあと思いますけど。そんな時は、音楽を聴いて、気分を晴らして、ま

た、話すようにしてますけど。」(ケースC) というように、気分が落ち込んでいる時や人と付き合い気疲れした時には、人から離れて休養をとる、一人で好きなことをする、といった自分なりの方法で気分を晴らしたり、疲れをとって、また人と付き合うための力をためている。このような時間は、人と付き合っていくためになくてはならない大切な時間となっていることが特徴である。

<テーマ9>一人でやりたいことがあるので、積極的に一人の時間を作って、その時間を大切に使う

対象者の多くは、人という方が一人でいるよりも好きであると感じている。しかし、目標とするものを目指して集中してやりたいことや、「(楽しみにしていることとして) 晩酌です。楽しいですよ、酔うと。みんなでは飲まん。別々に飲んでる。」(ケースA) のように自分のペースで楽しみたいことを持っており、その時間は一人になりたいと思っている。また、対象者の中には「(自分が考え事している時に話しかけられると) ちょこっと頭くる時もあるけど。それを帰って考えて、一人で考えゆうとき、話しかけられたらまずいき、部屋に入ってます。そう、一人でおりたいなあって。」(ケースB) というように一人になりたいと思ったり、一人にならなければならぬと思う時間は、人から離れて一人の時間を積極的に作っている。これらの時間は、人に邪魔されたくない時間であり、大切に使っていることが特徴である。

<テーマ10>空いている時間を人と過ごそうと思うのではなく、気ままに過ごせる自分の時間として、することを見つけて一人で過ごす

「(デイケアが) 終わって帰ってから、自分で一人でいるのになんか友達がほしいなあ思う時はある。そういう時は、ショッピングセンターに行って、ジュース飲みながら。自分の自由な時間にそこに入っておれるし、好きなもの買えるし、ええなあ思う。」「自分の時間が空いとる時に。パチンコ行って。」(ケースB) というように一日の中で予定もなく空

いてしまった、周りに話し相手がいない時間がある。このような時間は、何でも好きなことをして過ごせる自由な時間、気を使わないで過ごすことができる時間であり、あえて人と過ごそうとはしないことが特徴である。

VI. 考 察

以上のテーマから、統合失調症は自己決定に基づいたセルフケア行動を行う中で、気持ちを満たしたり、人のことを考えて行動したり、心身の状態に合わせて行動することで、その人なりの楽しさ、安心感、充実感などが得られていることが明らかになった。

在宅精神障害者の地域生活支援に関する研究⁹⁾において、在宅精神障害者から「気を使って生活をしている」、「人とどう話をすればいいのか当惑する」というような言葉が聞かれ、精神障害者は人と接する時には緊張をしたり、気を使うということが考えられる。しかしテーマ2の対象者は、気を使わなくてもよい付き合い慣れた相手や気の合う相手と関わることで、安心感を得、頑張りすぎずに過ごそうとしていた。緊張などによって身体的にも精神的にも負担がかかり、疲れ過ぎることがないように工夫していると考えられた。また、このような相手と付き合うことで、対象者は楽しさや心地よさを感じており、感情を安定させることにもつながっているのではないかと考えられた。

日常生活の自己管理における研究⁷⁾では、「仲間作り、共通の悩みや問題、楽しみについて話をすることが自分の調子を維持することや生活を整えるのに役立っていた」ということが明らかになっていた。テーマ4においても、対象者は人と一緒に過ごすという行動をとることで、寂しさや不安を紛らわせたり、楽しさや心強さを得ていた。これらのことより、人と一緒に過ごすということが、精神的な安定を図り、自分の調子を整えることにつながっているのではないかと考えられた。

テーマ2、テーマ4では、人と一緒に過ごすという行動であったが、テーマ8では、人から離れ一人で過ごす行動が見られている。精神障害者は、ニードとして人との接触を求

めている部分を多く持っていることがわかっており^{6)7)9)~14)}、今回の研究でのほとんどの対象者においても、人との関わりを避けるのではなく、むしろ積極的に求め関わっている様子がうかがえた。一方で、精神障害者は地域生活をする中で、人に気を使う¹¹⁾ということや、人付き合いにおいて緊張する¹⁵⁾ことがいわれている。また、対象者から、話し好きだけど、身体的とか精神的に疲れた時は話したくない時がある、という言葉も聞かれた。対象者の多くは人付き合いが好きであり、人との関わりを求めていながらも、緊張や気遣いをしていた。人と付き合うことでエネルギーを消耗し、精神的な疲れを感じることもあると考えられる。そのような時には、テーマ8のように、人から離れて一人の時間を過ごすという行動をとって一人になることで、周りからの刺激をなくし、気分転換や休養をとって精神的な安定を図り、再び人と付き合うための力を蓄えていると考えられた。

以上のように対象者は、自分の感情や体調を把握し、その時の心身の状態に合わせて負担をかけないようにしていた。精神的な安定を図るため、人と一緒に過ごしたり、人から離れるというように、バランスをとりながらうまく調子を整えていると考えられる。このような行動は、楽しさや心地よさを感じることができる心の拠り所となる仲間を持っていることや、心身を休めたり、安定させる術を身につけていることが基盤にあるために行えているのではないかと考えられる。そして、調子を整えながら人と関わっていくことで、感情を安定させることができ、相手との衝突を避けるなど、お互いに気分良く付き合っていくこともできるようになるのではないかと考えられる。すなわち、孤独と社会的相互作用のバランスの維持は、自分の調子を整え、安定させるセルフケア行動でもあり、人との付き合いを維持・継続していくことにもつながるといえる。また、こうして身体的、精神的な状態を認知し、調子を整え維持していくことにより、自分自身で上手く調整できているという自信を得ることができ、地域生活をも継続していくことにつながっていると考えられた。

VII. 看護への示唆

地域の中で生活をしていく上で、人間関係は重要な要素であり、他者との関わり合い方によって地域生活の質が違ってくるとされている。単に地域で継続して生活するだけではなく、その人自身が満足できる生活を送るためには、現在行っているセルフケア行動を維持したり、高めていくことが必要となると考えられる。

本研究での対象者は、ひとりひとり抱えている思いや考えが異なっていたが、自らの思いに基づいて自己決定しており、自分の望んだ行動を行うことで、満足感を得ているように感じられた。そのため、セルフケア行動を維持したり、高めるためには、自己決定を尊重することや、その自己決定を行動に移すことができるように支えること、また行ったセルフケア行動を振り返り、次のセルフケア行動に生かすことが大切であると考えた。

VIII. おわりに

今回、地域で生活する統合失調症者の孤独と社会的相互作用のバランスの維持におけるセルフケア行動を明らかにすることを目的に研究を行った結果、10のテーマが抽出された。その結果をもとに考察を行うことにより対象者は、心身の状態に合わせて人と一緒に過ごしたり、人から離れるなど自分なりの方法でバランスをとりながら生活を送っていると考えられた。このようにバランスをとることは、自分の調子を整えるだけでなく、周りにいる人との関係を維持していくことにもつながっているといえる。

また、人付き合いにかかる時間、一人で過ごすためにかける時間は、人によって異なっているが、その人なりに上手く孤独と社会的相互作用のバランスをとっていると考えられた。このように自分の望む孤独と社会的相互作用のバランスの維持におけるセルフケア行動を行うことで、満足のいく生活を送ることができ、生活の質が高まることにつながると考えられる。

本研究の限界として、今回の研究の対象者は、男性5名であり、年齢・性別に偏りが見られた。また、5名のうち4名が共同生活をしており、そのうち2名は同じグループホームで生活しているなど、地域の生活環境にも偏りが見られた。以上のことから、本研究を一般化するには十分とは言い難い。今後の課題としては対象者の層を絞ったり、対象者の数・年齢の幅・疾病の回復段階など条件を広げたり、時間をかけて研究に取り組み、一般化していく必要があると考える。

謝 辞

本研究にご理解いただき、そして貴重な経験を語って下さった対象者の方々に深く感謝申し上げます。また、お忙しい中、本研究の趣旨をご理解いただき、様々なご協力やご配慮をいただきました病院や施設の皆様にも心より感謝致しております。

尚、本稿は平成17年度高知女子大学看護学部看護学科看護研究論文の一部を加筆修正したものである。

<引用・参考文献>

- 1) 厚生労働省大臣官房統計情報部編：平成16年度厚生統計要覧，厚生統計協会，115，2005.
- 2) 厚生統計協会：国民衛生の動向・厚生 の指標，臨時増刊，51(9)，447，2004.
- 3) 厚生統計協会：国民衛生の動向・厚生 の指標，臨時増刊，47(9)，451，2000.
- 4) 山崎智子監，野嶋佐由美編：明解看護学 双書3 精神看護学，京都，金芳堂，101，2003.
- 5) 宇佐美しおり：地域で生活をする精神分 裂病者の自己決定に基づくセルフケア行動 の実態，看護研究，31(3)，25-37，1998.
- 6) 川口優子他：地域に住む精神障害者の生 活とその支援，日本精神保健看護学会誌， 12(1)，108，2003.
- 7) 石川かおり，清水邦子他：地域で生活す る精神障害者の日常生活の自己管理，千 葉大学看護学部紀要，24，18，2002.
- 8) ドロセアE.オレム：オレム看護論第3版， 医学書院，161，2002.
- 9) 奥田博子，大田彩他：在宅精神障害者の 地域生活支援の推進，地域看護，30， p128-130，1999.
- 10) 牧野田恵美子他：地域で暮らす単身者の 生活実態と援助の視点～全家連・地域生 活本人福祉ニーズ調査から～ REVIEW，5， 42-45，1993.
- 11) 川口優子，松田宣子，奥田博子：地域に 住む精神障害者の生活と意見，神奈川大 学医学部保健学科紀要，17，25-31，2001.
- 12) 茅原路代他：地域で生活する統合失調症 患者の生活への思いとその影響要因，日 本看護研究学会雑誌，27(3)，208，2004.
- 13) 大塚由紀子他：精神科における単身者の 生活実態調査，日本精神科看護学会誌， 41(1)，635-637，1998.
- 14) 築瀬誠他：精神分裂病通院患者の生活上 のニーズと生きがい感一性による違いを 中心に一，作業療法，18，305-314，1999.
- 15) 阪口真紀，氏家靖浩，三橋美典他：生涯 発達を通してみた精神障害者の生活実態 について，臨床心理学研究，39(1)，1-12， 2001.
- 16) 安田恭子他：地域で生活する精神分裂病 患者が抱える問題とその援助に関する研 究，富山医科薬科大学看護学会誌，3， 24，2000.
- 17) 近藤房恵：地域で生活している分裂病疾 患を持つ人々の日常生活，こころの看護 学，2(3)，107-112，1998.
- 18) 米田正代：精神障害者が困っていること一 大阪府精神障害者生活ニーズ調査「困っ ていること」の自由記載から一，大阪精 神保健福祉 44巻 1-6，62-69，1999.
- 19) 丸山由香，三田優子他：利用者からみた 精神障害者小規模作業所の役割と機能に ついて一聞き取り調査から現状分析と今 後への期待の検討一，病院・地域精神医 学，4(2)，79-80，1998.
- 20) 宇佐美しおり，鈴木啓子，Patricia Under- wood：オレムのセルフケアモデル一事例 を用いた看護過程の展開一第2版，ヌー ヴェルヒロカワ，49-50，2003.
- 21) Stephen J. Cavanagh 著，数間恵子・雄西 智恵美 訳：看護モデルを使う① オレ ムのセルフケア・モデル，医学書院，7， 1993.
- 22) ドロセアE.オレム：オレム看護論第1版， 医学書院，18，1979.